

# 直感への教育と教育センス

機関誌「才能」第1号（一九五三年）より

鈴木鎮一

## 直感への教育

優れた能力が発揮されるためには、いろいろな要素が総合されて行われるのでありましようが、その一つとして「為す」という行為だけを考えてみても、そこにはいろいろの優劣の段階がありましよう。

教育の立場からこれを眺めるとき、いかにできるか、という極めて簡単なことの中に、そのいかにという能力の段階が複雑に存在し、いかにの程度のあり方に従って、教育の優劣が決定されてゆくこととなると思います。

だから教育として能力を育てる場合、私どもは自分の能力限度や常識を水準としないで、一つの高い能力の生まれる条件とその方法をとりながら、他人の能力を育てることが必要だと私は考え、かつ実行しているのです。

はなくて、初歩から勘を育てる努力を積み重ねた教育を行なった場合に起る当然な結果にすぎないものだと考えます。

要するに「能力に徹する教育」のあるところには、常に非凡な能力が示されるもので、母国語は能力に徹した教育が行われて、みな非凡な能力を発揮しているのです。ところが、それがたとえ非凡な能力であっても、あまりにも多くの人々が発揮するようになると、それが常識となり平凡なことだと考えるようになるだけのことです。



「一つの高い能力が生まれる条件」ということは「勘の力まで育てる」ということでもあります。それを初歩であらうと上級であらうと常に一つのもので与えられた以上、その教材を材料にして、人の能力を勘の働きに近づけてゆく方法をとるのです。

そうした方法と、順次訓練してゆく勘の働きの数限りない積み重ねが、優れた能力となつて発揮され、人間の高い能力となるのだと考えます。そのよい教育法、初歩から一貫して、勘の力を育てる教育法こそ、人はその母国語（母語）の能力を育てる方法の中に行っているのです。

私どもが日本語を話す場合、思いと言葉とがほとんど直結して語られることを、一つの優れた能力の姿として認めなければならぬのではありませんか。

勘は、名人や大家となつてから初めて生まれるもので国語の教育は、人間を非凡な高さに育てる方法と原理を教えているものだと思うのであります。

外国語を学んで知ることは、自分の母国語の能力の高さであります。外国語を教えられ勉強したあとをふり返つてみますと、私の場合にはそれは「能力に徹した教育」から縁の遠いものであつて、ようやく記憶した程度、ようやく判つた程度の教育の積み重ねでありました。だから外国語を使用する時には、その記憶をたどり、ようやく判つた程度の理解をもつて判断しながら、話し、かつ読むという、情けない能力であります。

このような結果になるのは、一般の教育指導の常識が、記憶した程度、判断できた程度をもつて、教育したのだというがためだと思ふのであります。

教育指導の常識の変更をしなければならぬのです。私どもの才能教育運動の一つは、明らかにこの教育常識の変更を要求しているのであります。

才能教育においては、例えばキラキラ星が弾けるようになった場合、私ども指導者のいわゆる教育は、それにより立派に、より自由に、直感の能力へまで育てようとするのであります。ところが子供の親たちの常識が、今



までの一般の常識から一步も出ず、弾けるようになったのだから、次の曲へ進めるのが当たり前だ、という考えである場合、私どもは真に困るわけでありませう。

皆さんに判ってもらいたいところは、ここにあります。判らない親たちは、弾けるようになったのに少しも先へ進めてもらえないという不満をもっておられるので、練習も熱心でなくなり、指導者の意気込みと反対に、練習への努力が減ってゆくのです。だから才能を育てようと熱心になっている先生の場合、キラキラ星を一年もやってもまだ先へ進めてくたさらない、という不満の音が強く、先生たちを非難するようなことになるのだと思います。ようやく弾けるようになった、さあここだ!! と、その時こそ大いに努力していただきたいのです。もう弾くことができるのだから、努力すれば必ず上手になることも早いのです。立派に育てるための準備ができたというところへ、ようやくたどりついたのですから、このころの努力だと、大いに努力してくださいれば、ぐんぐん能力が高くなってゆくのです。

ところが常識が違っていると、さあ、ここだ!! これからだ!! という大切な教育のねらい所で、親の方々は、

さあ次だ!! という考え方に支配されてしまうのです。それで失敗するわけです。このような常識をもった人々の中では、生徒たちの能力は高くへは育つてゆかないのです。立派な先生、立派な指導者といわれる人々は、この点が違い、何らかの必要な形において能力を育てている人々で、育てる方法を知りそれを行っているのでありませう。

能力を「勘の能力へ近づけてゆく」または「直感の能力へまで訓練してゆく」教育のために必要な方法をそれぞれ案出し、行つてゆくところには、必ず人の能力は育つものだと思います。それからまた、そうした能力への要求の高さが、育てられる者の能力の高さになってゆくわけでありませうから「勘の能力へ近づけてゆく教育、直感の能力へまで訓練してゆく」高さが必要です。ここが大切なところでは、それぞれ指導者の要求する高さの差によつて、能力差も生まれてくるわけであるからです。それほどの問題ですから、このことを無視して曲ばかり先へ進むことは、能力を育てることは止めてくれということと同じことです。

(後略)